



「Under 100」への歩み

YOD Galleryとしては珍しい切り口の展覧会が始まる。これまでキュレーティング・ディレクターの立場で私が企画に携わってきたものは原則個展形式であり、一人の作家の存在を中心にして、いかにどの特性を選択し強調させる内容にするかに注目して作り上げてきた。今回は従来のスタイルとは正反対の手法、共通のテーマが前面にある企画となる。実験的な展覧会ではあるが、全く失敗を前提としているものではない。むしろ成功の可能性が高いと見込んで企画することが、ディレクターとしての使命でもある。

きっかけはとある方からの何気ない一言で、それを作家たちに投げかけていくうちに、本格的なグループ展へと内容がどんどん深みを増していったのである。そこで生み出されたテーマが「Under 100」。従来の弊廊での展示は、約4mの天井高を活かしていかに空間全体を使って作家の新たな展開を引き出せるかに重点を置いてきた。しかしながらここでは、それに反する手法として100cm以下の空間だけで展示するとどのような空間に変貌するのかというアプローチを提示した。一般的な体格の人が腰を軽くかがめた時の目線の位置を高さ100cmと設定し、それよりも下の位置に作品を展示することで、鑑賞者は膝を折り曲げるなど大きく体勢を変化させて作品を見ることになる。そうすることで一方向に限らない作品を鑑賞する視線の多様性、そして思いがけない価値観の発見があることを提示するものである。

私自身も、以前から美術作品における「視線」という概念に関心を持ってきた。かつてプライベートでグループ展の企画をした際も、テーマの中心に「作品と鑑賞者が放つ目線・視線」を設定した。作品と鑑賞者が衝突する「点」。そこにはまずお互いの立ち位置が合致することで存在を認識する「目線」に始まり、作品がメッセージを発し、それを受け取った鑑賞者が自らの感覚の中で咀嚼していく「視線」へと深化する過程を意図した空間作りを目指した。しかし、この複数の作家を扱うグループ展を企画することにおいて、大事な前提を忘れていた。それは「作家のアイデンティティ」というものであった。

私は、企画さえよければそれに応じて作家は柔軟に作品を作りかえることができるだろうという大きな誤解をしていた。それに気づいたのは、今回の当展の企画作りの際に行き詰った時であった。これまで弊廊で作家の様々な個性を検討し、どれを強調すべきかを選択して複数の個展を企画してきたにもかかわらず、展覧会の企画ありきで再度作家の柔軟性にまたもや期待していたのは情けない事実だった。こうした複数の作家による展覧会の企画において、大前提にあるのは「作家の存在」である。ただ作品を作ることのできる人物を選んでいるのではない。今までの作家活動の過程を見て、その内容に共感し敬意を払うことができるからこそ、作家として出品を依頼するのである。この「作家のアイデンティティ」への尊重が、どんな企画内容であっても無下にはいけないことを、改めて思い知らされたのである。

今回の展示に出品する作家は、全員弊廊での個展を経験している作家である。弊廊の空間の特性を各自で分析して、挑戦的な新しいスタイルで自らの空間を作り出していった点においては、3名とも共通している。作品というミクロな視点と、それらを見せる空間というマクロな視点、双方のバランスに非常に神経を使う作家たちである。そんな作家たちなので、低い位置での展示を前提とした作品の制作も本来であれば比較的容易にこなすことができたであろう。しかしながら「作家のアイデンティティ」に重きを置いた時、テーマありきで作品を制作することで、彼ら本来の作品の特性がゆがめられる危険性が存在していたのである。一般的な位置での展示では無いということ、イコール難しい位置での展示という解釈に置き換えてしまうことにより、作家



の可能性を削り取ってしまう恐れがあることに気付いた。100cm以下という高さは、一般的な作品の鑑賞スタイル、つまりオーソドックスな美術館の展示に慣れている人々のみが、見るのが難しいだけである。作家にとっては自らの才能を発揮した作品を制作することが、まず第一段階としてある。個々の作品が成立し、それから展示空間の中にかくにテーマを作って作品を配置していくかという構図ができ上がっていくのである。

弊廊の展示での私の理想は、100cm以下の展示位置によって各作家の持つ従来の特質をより顕著に現すこととした。通常の鑑賞スタイルと比較しても明らかに鑑賞者の姿勢をよりアクティブにしなければならない。そうした時に鑑賞者への誘導に効果的なのは、作品そのものが持つ「作品力」である。3名の作家の特質となる部分を、今回の新作ではより強調してもらいたいと彼らに伝えた。杉山は「かたちの表現力」、加賀城は「素材・技法の表現力」、そして服部は「具体的コンセプト（ヒト）の表現力」。当たり前のことかもしれないが、作家個々の本質に立ち返ることがこの100cm以下の展示という特殊なテーマを打破する最良の要素であり、鑑賞者が膝をかがめて作品と同じ視線に到達した時、彼らの「作品力」が鑑賞者の心に衝撃を与えるはずだと想定した。より各作家の評価の観点可以理解できるはずである。

しかしながら、各作家に具体的にこういう作品を作って欲しいといういわば受注制作のようなかたちは取らなかった。企画者の過度な介入は作家本来の良さを失う恐れがあり、もし受注制作でおこなうのであれば、それだけで十分企画は成立するだろうし、企画の一要素としておこなうには無理がある。よって、今回は私が理想とする部分を伝えて、あとどのように解釈するかは各作家の裁量に委ねた。企画者とは全く相反した作家の感性が、空間にどんな意外性を持ち込んでくるのかは、想定内のアクシデントとして興味深いものである。企画進行の中で計算されたものとアクシデントが入り混じった展示予想図は、もちろん私の中にある。これが、現実の展示とどれほどのギャップが生じたかは、共に展示後のテキストで総括と共に論じたい。

また当展は、fabre8710でも同様のテーマの下で展示をおこなう。YODはビルディングのゆったりした硬質な空間に男性3名の作家が、fabre8710では住居的で身体感覚に近い空間に女性4名の作家と、両者の展示は必然と対照的なものとなるであろう。両ギャラリーの出品作家の選定も、それぞれのギャラリー空間の性質に呼応したものとなっている。100cm以下の高さというミニマムな展示手法によって、各ギャラリー空間の特質が顕著に現れる可能性も秘めている。

果たして、搬入が終わったとき、二つのギャラリー空間はどのような対照性を提示できるのか。そして、弊廊空間では私の想定通りの世界が実現するのか。それとも思いがけない化学反応が発生するのか。もちろん最終的には来廊者の反応が正式な答えになるが、企画者として展示空間が完成した直後に一つの総括を出さなければならない。それがそのまま来廊者への企画の解説となるだけでなく、自ら進めてきた企画の過程の一つ一つに整合性があったかどうかを再考できる。そして、究極はこの「Under 100」というテーマがアートの企画としてふさわしいものであったかどうかを総括する義務が私に課せられているのである。

2010年1月7日